

# 亭主殿、今日はいずこで縄張りか

細野 哲弘

独立行政法人 石油天然ガス金属鉱物資源機構 理事長  
(元 特許庁長官 元資源エネルギー庁長官)

我が夫は藤堂和泉守高虎と申します。巷間では「築城の名人<sup>1)</sup>」との評判を頂戴しております。確かに関与した城郭の数は、私が覚えきらないほどに上りますし、高積み<sup>2)</sup>の石垣、犬走り<sup>2)</sup>など格別の趣向には、その筋から賞賛を頂いているようでございます。もともと近江の土豪の家に生まれ、ちゃんとした仕官をするまでにいろいろ苦労があり、のちに講談話<sup>3)</sup>になるような経緯もあつたやに聞いております。また、たびたびお仕えする主君を替えるとの芳しからざる評判も耳にしております。

それにしても、手掛けたお城の場所が随分と広範各地に散らばっているのには、感心致します。時代が下った時期の二条城の縄張り、大坂城の修復などはともかく、出身の近江に近い膳所、津、伊賀上野の城だけでなく、丹波の篠山城、四国の阿後森城、伊予大洲城、今治城、板島城(宇和島城)あたりまで手掛けております。『縄張り』とは、築城予定の敷地に文字通り縄を張って、建物や石垣などの位置を決めることとさせていただきます。そうと聞けば目の色を変えるお方であり、「亭主殿、今日はいずこで縄張り



藤堂高虎生誕地(滋賀県在土「安濃津城」というのは、「津城」の別名。近くに高虎公園や在土八幡神社があるほか、最近古民家を改造した高虎の顕彰記念館(「和の家」)が設けられている。)



河後森城(愛媛県松丸 もともとは12世紀頃に伊予と土佐の境を見張る山城として築かれたものだが、高虎の前任の戸田勝隆によって近代城郭に整備された。高虎は入部以降土佐の山内一豊を意識してこれを維持したが、後に城郭資材を宇和島城(板島城)の月見櫓に転用している。1615年に一国一城令で廃城となったが、現在は周到な調査を経て比較的良好に縄張りが保存されている。)

- 1) 当時、築城の達人として、黒田孝高(官兵衛)、加藤清正と並んで三名人とされた。高虎の築城の巧みな技術は、近江の国周辺の工藝職能集団との繋がりによると言われている。石垣は穴太衆、作事は大和大工の中井衆、近江大工の甲良衆が大きく貢献し、その技術はのちの日光東照宮の造営にも影響を与えたと、滋賀県在土の「和の家」の係の方から伺った。
- 2) 犬走りとは、城の石垣、土塁と、堀の間に設けられた狭い空きスペース。石垣などの崩壊を防ぐため外側から補強するのが目的であるとされる。反対に石垣の内側に設けられた小径は「武者走り」という。
- 3) 「出世の白餅」という講談話がある。これは、まだ与右衛門と称していた高虎が浅井家から出奔し、次の仕官先を探すうち路銀が尽き、空腹に任せて三河の吉田というところで旅籠(はたご)店先の榊(ます)に盛った餅を無銭飲食しそうになったという話。その旅籠の主人が、その妻が同じ近江の出身ということもあって同情し、「一度故郷に帰り、出直せ」と諭して路銀まで出して送り返してくれた。これを恩に感じ、後年伊予の大名となった際に、旅籠の主人にくだんの代金支払いに加えて鄭重な恩返しをするとともに、以後参勤交代の折は三河吉田に投宿するようになったとのストーリー。「榊(ますます)ご出世、末は白餅(城持ち)」との含みがある。因みに、藤堂家の旗指物は「三つの白餅」である。



藤堂高虎像三態（左から、滋賀県在士/高虎公園、津市/津城、今治市/今治城）

か」という思いで見えておりました。されど、ずっとその仕業を眺めておまして、お城の造作に秀でるその職人腕を買われるままに、築城と聞けば誰のためであろうが、何処であろうが、ひたすら造りたがって飛び回ったというふうには思われません。何やはっきりした思い、狙いがあったように感じられます。

高虎の生い立ちを、私から縷々申し上げるつもりはございません。正直なところ、興入するまでのことは人からの伝聞に過ぎませんし、また私にとっては、城づくりを通じて高虎が心を砕いた「もっと別のもの」の方に関心がございました。

さて、さて、私でございますか？ 申し遅れました。私は久芳と申します。天正9年（1581年）に高虎に嫁しました。夫25歳、私は26歳でございました。私が政事の機微に多少通じておりますのは、父・一色修理太夫が室町幕府の四職家<sup>4)</sup>の流れをくむ者であり、一族には金地院崇伝<sup>5)</sup>などがおり、何かとその筋の風聞が耳に入るからでございます。もちろん、個々の政事の中身は詳らかではありませんが、夫が取り掛かる城づくりの背景が、都度に透けて見えることがございました。

私は高虎とは25年連れ添いましたが、ついに子をなしませんでした。武家にとって、家の存続に子をなすことの大事さは格別でございます。高虎は妻の私を大層慈しんでくれましたが、そうであればあるほど、妻としては子のないことをずっと気に病んでおりました。側室を迎えてはと何度となく勧めても、なかなか意に介しませなんだ。確かに、羽柴秀長様（のちの豊臣秀長様）のもとに養子で出ておられた丹羽長秀様ご三男・吉高様<sup>6)</sup>を、改めて養子に貰い受けたりは致しました。しかし、それも専ら秀長様との主従の関係を深めるための慮りから出たもので、藤堂家を云々するという趣旨ではなかったように思いました。そうこうしているうちに、のちにもう一度触れることと致しますが、豊臣秀長様、秀保様という漸々にして恵まれた主君が、相次いで亡くなられてしまわれます。主君家の存続・後継擁立も果たせず、失意のままに高野山に入ってしまうこともあったのでございます。その後、秀吉様からの格別の説得により再び下山し、2万石を頂戴しておりました秀長様の家臣から、一挙に伊予の宇和、喜多、浮穴三郡に7万石で封じられ、板島城（のちの宇和島城）に入りました。旧城主の戸田勝隆様が朝鮮の

4) 四職家とは、室町幕府の軍事・警察並びに徴税を司る侍所の頭人（長官）の職を、交代で務めた守護大名の赤松、一色、京極、山名の四氏のこと。幕府実務の要であったが、明応の乱（1493年）以降は、畿内の混乱、大名の在国化などのため、空席とされ消滅した。

5) 金地院崇伝は、室町幕府幕臣の一色秀勝の次男として生まれ、足利將軍家の側近として将来を約束されていたが、室町幕府が滅亡したため、官寺中最も格式の高い南禅寺にて出家。のちに徳川家康に仕え、その有能な側近ブレーンとして手腕を発揮した。伴天連追放之文を起草したほか、寺院諸法度・武家諸法度・禁中並公家諸法度など徳川政権の基本重要制度のほぼ全ての立案に関わり、「黒衣の宰相」の異名をとった。大坂の陣の発端になった方広寺の鐘銘事件にも関与したと伝えられる。

6) 丹羽吉高は、織田家の重臣であった丹羽長秀の三男で、幼少名仙丸。当初秀吉による丹羽長秀取り込みの懐柔策として羽柴秀長（大和豊臣家）の養子となったが、家は甥の秀保が家督を継ぐこととなったため居づらくなり、吉高9歳の折、改めて子のなかった高虎に養子として迎え入れられた。これにより、高虎の大和豊臣家における重臣たる立場が確実となったのは事実。一方、吉高の不運は続き、藤堂家に実子高次が誕生したため、23歳の折に分家扱いとされた。伊賀名張に封じられて名張藤堂家（宮内を通称し、藤堂宮内家ともいう）の祖となったが、本家の高次とはそののちも対立状況が続いた。92歳まで生きた。



宇和島城（愛媛県宇和島市 かつては山のすぐ下まで海水が及んだ海城で、海からの眺めと攻め手の錯覚を意識した変則五角形の回廊に囲われた天守（四角形）を擁する。丸串城、板島城と称した時期がある。現在の天守は宇和島藩二代藩主伊達宗利によって整えられたもの。私事なるも、現存12天守のうち、筆者がこれまでなかなか訪問の機会を得られなかった唯一の城。本稿の執筆を機に、ついに満願成就。思わず笑みがこぼれる。）

役に出兵中に病死され、この地が空いていたためでございますが、それにしても大層な思召しでございました。前後して、高虎自身も朝鮮の戦役に従軍いたしました。その頃高虎は何を思っていたのでございましょうか。

高虎が漸くにして、長高連様の息女・松寿夫人<sup>7)</sup>を側室に迎えてくれましたのは、ちょうどその頃でございました。幸い、二年後には松寿夫人に子息（のちの高次）が生まれ、やっと家の安泰の目途がつかしました。高虎46歳の時でござ



松寿院墓所（津市 寒松院）

いました。でも、高虎の視線は、藤堂家という一個の家のことよりも、もっと大きなものに据えられていたように思われます。

高虎が徳川家康様とお近づきになりましたのは、秀吉様から聚楽第の近くに家康様接遇のため、屋敷を普請するよう申し付けられたことが契機でございました。その折、出来上がった屋敷が当初の図面と異なることに気づかれた家康様からそれを問われて、高虎が「防御の点で不足があることが分かり、ご滞在中の客人に万一のことがあつては、主人（秀吉）の活券<sup>こげん</sup>にかかわると思料し、作事奉行たる私の一存、負担にて変更致しました。」と応答したことに、家康様がいたく感じ入られたとのことでした。

そもそも家康様のための屋敷普請というのは、秀吉様にとっても、その威光顕示の上で大層大事な出来事でございました。時代が下ってこうして思い出話をしておりますと、なんとこの諸将の目の前の勢力関係や状況がずっと前からそうだったような気になります。信長様が本能寺で斃<sup>たお</sup>れられてからの秀吉様と家康様との関係は、なかなか微妙でございました。天正12年（1584年）の小牧・長久手の戦いというのは、今でこそ「そんな戦もございましたね」くらいの印象しかございませんが、秀吉様は織田信雄様・徳川家康様の連合軍とぶつかって、珍しく手痛い敗北を喫しられました。さすがに、秀吉様はそののち政治交渉の妙を駆使して、同年11月には講和により信雄様からの臣従を確保されましたが、家康様とはそれが果たせませなんだ。関白という位を極められた秀吉様のお気持ちからすると、何とか家康様に臣従の礼を取らせたいと思われたのでした。その一念で、年齢のいった妹君（朝日姫様）を家康様の亡き正妻（築山殿）の後継<sup>あとがま</sup>に押し込まれたり、ついには自らの生母様（大政所様）を岡崎城に「親子対面」の名目でわざわざ派遣したりなさいました。そんなこんな<sup>ようや</sup>の挙句、漸くにして家康様を大坂城に招き寄せ、諸大名の前での臣従の形を整えられたのは、天正14

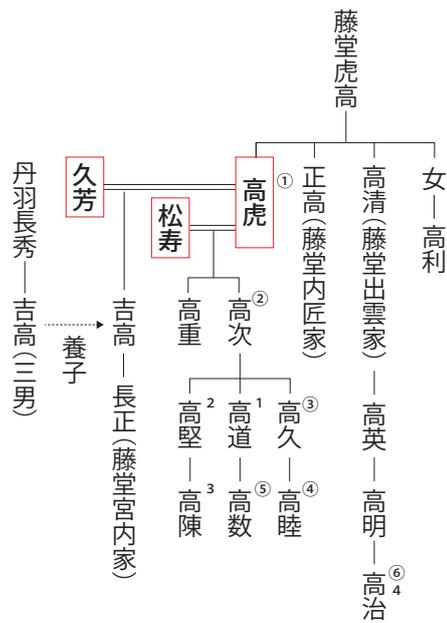
7) 松寿夫人は、もともと宮部継潤という武将の側室であったが、宮部の死によって零落し辛酸をなめる時期を過ごした。朝鮮の役で高虎が宮部の窮地を救った縁や久芳夫人が松寿夫人と同郷でもあったという繋がり、高虎の側室に迎えられた。なお、高虎は久芳、松寿の二人の夫人以外には女性を迎えなかったが、松寿夫人を迎える前の紀州粉河（こかわ）城主の時代に、侍女との間に男子をもうけたとの記録がある。高虎にとっての初めての実子であるが、久芳夫人の手前を大いに憚（はばか）り、臣下の子として養育させたとある（津市教育委員会編集『高虎さんのはなし』より）。

年(1586年)10月のこととございました。高虎の造った屋敷とは、その家康様を接遇するための肝煎であったのでございます。

少し話の先を急ぎすぎたかもしれません。こののち、高虎は家康様の知遇を得て昵懇の度合いを深めてまいるのですが、その実相はこのあと順に触れることと致しまして、その前に高虎の「主人替え」について、妻からみた見立てを少しばかり申し上げておきます。夫高虎の「主君に仕える道」を探る縁になると思うからでございます。高虎が武家としては甚だ覚束ない土豪の出身であることは先に申しあげました。高虎に限らず、自らの才覚と腕に自信のある仕官希望の者は、諸国を巡り、縁故を頼って条件の良い主人筋を模索しておりました。ただ、仕官の口はそう頻繁にあるわけではございませんから、苦労を重ねながら待みとする武將を観る目を養っていくわけでございます。

高虎にとっての重要な転機は羽柴秀長様(のちの豊臣秀長様)との邂逅でございました。羽柴様ご一族は、ご苦勞されて頭角を現し戦乱の中で伸してこられたものの、信頼できる譜代の郎党をお持ちでなく、広く人材をお求めになっておられました。これと主君を求める高虎の意向とが重なっての仕官でございました。当初300石でのお召し抱えでございました。秀長様は天下を狙う兄秀吉様の片腕として「主將を引き立てる参謀」の役割を懸命に熟しておいででした。その姿に真近で接するうち、「自らは天下人たるを狙わないが、それに相応しい主人を補佐する」という生き様に目覚めたように思われます。

さらにもう一つ大切なことは、当然のことながら、補佐すべき主君が目指すべきものに、共感できるかどうかでございました。女の口からは僭越不相応ではございますが、「天下人」というのは、戦乱を終わらせ、民に平和と安定をもたらすお方でございます。高虎は秀長様を通して、秀吉様の天下統一には期待があったと存じます。また、豊臣家(羽柴家)に仕



藤堂高虎関係系図

(伊勢津藩は、高次の子の時代に32万3千石から5万3千石を分知し、支藩として久居(ひさい)藩を創設。丸数字は津藩主、数字のみは久居藩主の系列。)

官して身の置き所ができた、世に出たという意味で、高虎はれっきとした「豊臣恩顧」の武將でございませぬ。しかし、秀長様と秀保様<sup>8)</sup>、そして秀吉様がお亡くなりになったあと、その恩顧の故をもって当然には、秀頼様を盛り立てる立場をとるということになりませなんだ。それはまさしく時勢を受けて「世に安定をもたらすお方」は誰であるかという見立てに係わったからでございます。

秀吉様が関白を甥の秀次様に譲られた後に、淀君様に秀頼様がお生まれになり、状況が一変致しました。あれほど執念をもって進められた朝鮮への出兵を放擲されたかと思う間もなく、理のない事由で、秀次様を追放、蟄居のうえ自害に追いやり、その後ご一族をいたいけないお子様を含め悉く処断されました。秀頼様かわいさのあまり、一時はあとを託した肉親に掌を返したような無慈悲な仕打ちをなされて、人々の心胆を寒からしめ、政事にも混乱を及ぼしたその仕業に、高虎は大変な衝撃を受け、「天下

8) 豊臣秀長は、大和豊臣家の主として秀吉を助けて活躍したが、小田原攻めの前あたりから体調を崩し、52歳を一期に死去。秀吉の姉の子息秀保がその跡目を17歳で継いだ、大和十津川で不慮の死を遂げている。その真相は明らかではないが、秀次排除の時期と重なり、また大和豊臣家は即刻廃絶とされていることから、豊臣家の家督を秀頼に一本化する作為の一環ではないかとの風説がある。

人」への憧<sup>きたい</sup>が陰ったのではないのでしょうか。

暫くののち秀吉様が亡くなるのですが、当時、高虎が目の当たりにした有力な武家の形勢は、随分と流動的なものでございました。結局において、高虎は家康様との間にできた厚誼<sup>よしみ</sup>に賭ける決断をするのでございますが、高虎は、どちらが強いか、どちらが勝つかではなく、何よりも、誰が世の安寧<sup>まこと</sup>の真の担い手になって戴<sup>いた</sup>けるのかに判断の軸を置き、徳川様こそがその器量であると見定めたのだと存じます。

当時の状況でございますが、生きた事情に通じておられない方からすると意外な感じを持たれるかもしれませんが、当時のもとより、端的に申し上げて、関ヶ原の合戦の後ですら、徳川様の優位はなかなか微妙でございました。換言すれば、「秀吉様亡きあと、兵馬の帥<sup>ゆくえ</sup>の行方は自ら家康様へ」というような状況では、必ずしもなかったと存じます。

慶長5年（1600年）の天下分け目の関ヶ原の合戦においても、戦前の勢力具合は五分五分、むしろ豊臣方（石田三成方）が優勢という見立てでございました。また、合戦の後も徳川様方に雪崩<sup>なだれ</sup>を打つという状況では決してございませでした。むしろ、双方がお互いの動向を窺<sup>うかが</sup>いながら奇妙<sup>にらみあつて</sup>に拮抗<sup>あつて</sup>していたというのが実情でございました。

それには理由がございませ。関ヶ原の戦いにおける徳川様方の勝因の最大のもの、徳川様方が豊臣方の勢力を戦いの前に調略<sup>はかりごと</sup>を以って有効、巧妙に切り崩されたこととございました<sup>9)</sup>。しかし、まさにその故に、家康様は戦後処理に当たっても、東軍にお味方した旧豊臣方の諸大名の処遇には配慮をせざるを得なかったのございませ。石田三成を敗死させたものの、西軍の本来の盟主である秀頼様は、一介の大名になられたとはいっても、大坂のお城に

65万石の威を保っておられました。豊臣家は、秀吉様以来の朝廷との関係は親密で、秀頼様は関ヶ原の合戦当時には従二位権中納言でいらっしや、その後も順調に大納言、内大臣、右大臣と昇進され、慶長13年には左大臣に任官しておられます（「押小路文書」より）。家康様のあとの二代將軍秀忠様は、この時まだ内大臣にすぎない時期でございませ。

関ヶ原で西軍に属して戦った西国の大名は、取り潰されたり、大幅に減封されましたが、家康様は豊臣家との関係では、秀吉様との間に結んだ臣従関係を解消しきれてはおられませなんだ。そして何より肝心なことは、関ヶ原で勝ったといっても、畿内及びそれより西には徳川様のご一門、譜代を新しく配置、展開することが、少しもできなかったこととございませ。また、中国・四国から西には、依然有力な豊臣恩顧の大大名<sup>10)</sup>がその勢力を維持しておられました。

こうした状況のもとで、「世の安寧を担い、民を安んじる秩序の担い手」と侍みまいらせた徳川様の治世を、いかに名実ともに強いものにするかが肝心でございました。そのためには、徳川様に抗して秩序を乱しかねない豊臣恩顧の諸大名の連携<sup>くまび</sup>を打ち込み、それぞれを封じ込めることが要諦<sup>きまつ</sup>でございました。「封じ込め」と申しますと、ともすればのちの大坂の陣を念頭に、大坂城及びその周辺の城郭構造における対処を思い浮かべがちですが、むしろ、東軍にお味方した方々も含め、より広く豊臣恩顧の大名の方々全体の分断について構想されたのございませ。

高虎が尽力致しましたのは、まさにそのための戦略・布石でございました。むろん、単独ではできませんし、無闇に実力行使に出る訳にもまいりませ。

9) 関ヶ原の合戦の雌雄を左右したのものとしては、合戦当日の小早川秀秋ほかの内応（うらぎり）が有名であるが、そのためにはむしろ事前の調略が重要であった。高虎は、合戦に先立ち、近江ゆかりの豊臣恩顧の勢力に積極的に働きかけ、朽木氏、脇坂氏、小川氏といった武将から内応の約束を取り付けた。なお、小早川秀秋、吉川広家などの説得には黒田長政が活躍した。

10) 東軍についた豊臣恩顧の有力大名としては、福島正則（安芸広島49万石）、加藤嘉明（伊予松山20万石）、加藤清正（肥後熊本54万石）などがある。



松山城と加藤嘉明像  
（松山市 松山城を築いた加藤嘉明は、隣国ということもあり高虎とは折り合いが悪かった。しかし、高虎はその実力を評価し、家康にその起用を進言している。）

金地院崇伝殿などと綿密に打ち合わせ、時期を選び、他の打ち手をも併せながら、綿密に城を配し意を通じた武将をめぐらせて、豊臣方の勢力の包围網をつくり、分断する作戦でございました。

切り崩す狙いの大名につきましては、領主としての不行跡はもとより、キリシタン禁制<sup>11)</sup>なども、この作戦に巧妙に利用されました。慶長13年に改易をされた伊賀上野城主・筒井定次様、丹波八代城主・前田茂勝様の場合がそれでございます。いずれ



伊賀上野城 (伊賀上野市)

も豊臣恩顧の有力大名で、筒井様は戦国の梟雄筒井順慶様のご養嗣子、前田様は秀吉様の下で五奉行の一人であられた丹波亀山城主・前田玄以様のご子息(三男)でいらっしゃいます。しかも、これらのお城の位置が地勢的に大変重要でございました。伊賀は山城、大和、近江、伊勢に通じる要衝の地であり、丹波は京、摂津、山陰を睥む緊要の地でございます。筒井定次様の場合は家中の揉め事が災いした事情もありましたが、お二人ともキリシタンであることを咎められて、城を明け渡しておられます。伊賀上野城の後には高虎が入り、早々に城の改修に取り掛かっております。同時に手掛けた伊勢の津城、亀山城の改修も、大坂包围網の重要な要石でございました。前田様の後には徳川譜代の松平康重様が常陸から入部され、新たに丹波篠山に築城をされました。その築城の指揮を執ったのも高虎でございます。

高虎は、関ヶ原の戦いののち前後の功により12万石を加増され20万石となり、早々に今治の城の築城に取り掛かりました<sup>12)</sup>。これは安芸の福島正則様を対岸から牽制するためのもので、配下を派遣して守らせた甘崎城<sup>13)</sup>と連携しての構えでございませ



津城 (津市)



今治城 (今治市)

- 11) キリシタン禁制は、天正15年(1587年)の秀吉による伴天連追放令がその最初である。徳川幕府においても、正式には慶長18年(1613年)に金地院崇伝が起草し秀忠の名前で発した伴天連追放之文により、その教義を否定した。但し、正式のお触れの前においても、為政当局はキリシタンへの警戒、牽制から、折に触れ事実上その宗旨、信者を問題にした。
- 12) 今治城は、日本三大水城の一つで、全長572間にわたる三重の堀に海水を引き入れ、直接外からの船が入れる構造を有する。東西43間、南北42間、千鳥破風の五重六層の天守閣と本丸を中心に櫓、門は20余に上る。高虎が伊勢の津に移封の際、天守は丹波亀山城に移築された。明治の廃城令で廃されたが、昭和55年に現在の望楼型天守が再建された。
- 13) 甘崎城とは、伊予の国大三島の東端である瀬戸甘崎の海中にある島城で、日本最古の水軍城と言われる。満潮時には水没し、「海中縄張り」となる。能島村上系、来島村上系の一族による領有ののち、高虎の領地するところとなり、惣石垣に大改修されて、「大坂包围網」の一環を担った。

た。その後高虎には、石高はそのままに伊勢・伊賀に移封の沙汰があり、板島城は富田信高様に託されました。さらにその富田信高様がそれからすぐに改易となられたことに伴い、高虎は改めて板島の城を預かり、その城に股肱の重臣藤堂新七郎信勝を差し向けて、城の大改修を命じました。これは愈々微妙になってまいりました大坂情勢に対応して、島津様など九州の豊臣恩顧の大名に対する抑えを意識したものでございました。

また、慶長14年には淡路島の洲本城の移築がなされております。紀伊半島から瀬戸内に出る要としてのこの城の枢要性に鑑み、高虎はこれが豊臣方に押さえられる危険を払拭するために廃城とし、その資材は、伊予大洲城の建設に転用致しました。勿論、淡路島の地勢的重要性は依然として残りますことから、高虎は洲本に在番の代官を張り付けることにも目を配っております。あまり印象が強くないかもしれませんが、湖国・近江出身の高虎は水軍の指揮も執っております。朝鮮の役でも船奉行として水軍を率いましたし、瀬戸内の海とその重要性には格別の思いがございました。城を潰したのち、洲本の在番



伊予大洲城 (伊予大洲市)

の士には西国の大名が有する軍船の始末に当たらせました。九鬼守隆様と連携して、500石以上の軍船は悉く徴集し没収致しました。一部の船が池田輝政様<sup>14)</sup>に下げ渡されていますが、輝政様は海域を睨んだ大坂包圍網の立役者で、高虎とは緊密に連絡を取っておいででした。池田様は洲本城に代わって岩屋城を、そしてそのあと由良城を築城して、本拠の姫路城から播磨の明石城、高砂城、赤穂城とつながる包圍の繋がりを構築されました。



大坂包圍関係地理図

14) 池田輝政は、信長の重臣池田恒興の次男として生まれ、小牧・長久手の戦いで父、長兄が討ち死したことにより、家督を継いだ。本能寺の変のあと秀吉に仕えたが、その没後は家康に接近して、関ヶ原の合戦では東軍に組した。その辺りも高虎と通じるものがある。関ヶ原の合戦では、前哨戦の岐阜城攻略などで功績を上げ、播磨姫路に52万石で封じられた。

これらによって、京、大坂に通じる主要な街道、海路を抑え、東海道から、畿内、瀬戸内を繋ぐ「大坂包囲網」がほぼ完成いたしました。

家康様は、このように状況を整えた上で、徳川家の京での城郭である二条城に秀頼様が伺候なさるといふ機会を、とうとう実現されました<sup>15)</sup>。慶長16年(1611年)のことでございました。そして、さらに周到な準備を重ねられ、満を持して大坂の陣(慶長19~20年/1614~15年)に臨まれたのでございました。

高虎については、大坂包囲の意図や城の構造など武辺のことが取り上げられますが、女目からみて気付いたことがございます。高虎の築いた城は、外観が白色のものが、また城下の町の通りが真直ぐなものが多ございました。伊予大洲城、板島城(宇和島城)、今治城における町割りは、敵の来襲に備える戦をのみ想定したものとは思われませぬ。城下を、米町、鍛冶屋町、船町といった具合に、職人をその種類ごとに割り付け、住まわせました。来るべき安定の世における民の栄え、便宜にも思いを

致した故のことだろうと存じます<sup>16)</sup>。また、今治城の白く美しい佇まい、町割りの妙を愛でて頂いた秀忠様から、同様なものと所望され、琵琶湖畔に膳所城を縄張り致しました。

高虎と家康様とは、傍目にも特別の関係でございました。家康様からは、外様であるにもかかわらず、「天下に大事あるときは一の先手に高虎、二の先手に(井伊)直孝を以って備えよ。また、どんなことがあっても藤堂家を末代まで伊賀・伊勢から動かしてはならぬ。」と仰って頂くほどに、この上ない信を頂戴しておりました。また、駿府城の大手門の真ん前に一番大きなお屋敷まで頂いておりました。さらに、さすがに他の譜代の皆様を憚って謹んでご辞退申し上げましたが、家康様からは松平の家名を許すとまで仰っしゃって頂きました<sup>17)</sup>。

高虎の家康様への想いもまた格別でございました。家康様がお亡くなりになる枕頭に侍った折、「これまでよく働いてくれた。礼を言う。しかし、わたしは宗派が異なり、あの世では一緒ではないのが残念。」との言葉を聞くや、即刻その場を下がり、別



膳所城址(大津市 現在は城址公園になっているが、琵琶湖から水を引き込んで堀を作り、4300坪もある本丸には湖に突き出した美しい四重四層の天守閣を備えていたという。大手門は全て近隣の神社に移築され、公園には模擬門と天守址の碑が残る。筆者が訪れた日は生憎の大雨であった。)



高虎の兜(滋賀県在土の「和の家」の展示より)

- 15) この秀頼の二条城訪問は、豊臣家の徳川家への臣従の儀式であり、政治的意味合いは小さくない。ただ、このあと家康は三カ条の申し渡しを發し、諸大名に誓詞を出させているが、秀頼はこれに応じていない。
- 16) 歴史的に見て、城の壁面の色は、戦闘のためのものは黒く、政治・行政のシンボルというものは白いものが多いのが特徴。さらに、城下の区画は、敵の侵入を防ぐことに主眼を置くほど複雑で、通りもT字型で屈曲を多用し、先を見通せない造りが多かった。一方、時代が安定するにつれ、城下には市の設営、物の運搬などの便宜のために、直線的で幅も広い通りが用いられた。
- 17) 本稿の主題からはやや外れるが、高虎が周りに随分と細やかな気配りをする人物であったことを付言しておきたい。譜代別格ともいふべき特別な扱いを受けつつも、むしろそうだからこそ、もともと外様であるとの分を弁(わきま)え、増長の誹(そし)りを受けないよう慎重に身を処している。松平姓の固辞もそうだが、もともと佐渡守の官名が徳川の謀臣本多正信のそれと被(かぶ)るとして、自らは和泉守に変えている。また敗軍の将にも細やかな対応を見せ、敗れて縛についた関ヶ原の敗将の石田三成、大坂の陣の敗将の長宗我部盛親にも懇篤な言葉をかけている。さらに、自らの処世にも鑑み、自分の元を離れる臣下にも心を配った。

室に控えておられた天海大僧正様に願って、その場で元々の日蓮宗から家康様と同じ天台宗に改宗致したほどでございます。また、高虎の兜についても思い当たる場合がございます。「黒漆塗唐冠形兜」という名の兜は、六尺三寸の長身の高虎が馬上にあってそれを被りますと、それはそれは圧巻でございました。何しろ「纓」と称する兎の耳のようなものは、それだけで三尺（90cm）ほどの長さがあり、「ここに高虎あり」の格好の印でございました。もともとは鬼神、荒神が被る能装束の趣向からとったもので、秀吉様から拝領の特別のものでございました。その兜を高虎はのちに部下の藤堂良重に下げ渡し<sup>18)</sup>、自らの出立ちの趣きをがらりと変えてしまいました。徳川様にお仕えするようになってからのことです。

改めて顧みますと、それこそ「白餅」を擲擧される身分から立ち上がり、苦勞を重ねつつ、最後は草創期の徳川將軍家の基礎を盤石とするため<sup>19)</sup>、いろいろと智謀を尽くした人生でありました。城造りは、その数も趣もさることながら、実は「どう作るか」ではなく、「何処に作るか」、「どうしてそこに作るか」、さらに「どんな城下にするか」が肝心でございましたね。

確かに主君をたびたび替えましたが<sup>20)</sup>、豊臣家を経て徳川家にお仕えする前までに暇を告げた方々の多くは、そののち滅んでいらっしゃる。その意味では、真にお仕えするに足る主君探しの一生でもあったのではないのでしょうか。巡り合った徳川様には、ついに世の安定の真の担い手としてお仕えするに相応しい主君像を見出したようございました<sup>21)</sup>。



藤堂高虎墓（津市 寒松院）



上野・寒松院（東京上野にある藤堂家の菩提寺。津市のそれと同じ名前の寺。実は上野動物園内の一角にも高虎一族の墓がある。動物の供養塔の裏手の堀の向こうにあって立ち入れないが、彼の治績を思うとき、平和な時代の子供たちを楽しませてくれた動物の慰霊碑越しに平和な東京の町を見守るという按配に、妙を感じる。）



久芳院墓所（津市 四天王寺）

- 18) 高虎からその象徴ともいえる兜を譲られた藤堂良重はいたく感激したが、それは彼に不幸をもたらした。大坂夏の陣に勇然とそれを着用して戦いに臨んだ良重は、豊臣恩顧の将兵から「裏切りの高虎」と看做（みな）され、集中攻撃を受けて討ち死の憂き目を見た。
- 19) 高虎の徳川政権基盤の強化に果たした業績は、大坂の陣以降においても多般に亘る。例えば、秀忠の潜在的ライバルになりかねない松平忠輝（越後高田60万石）の失脚に加担したり、他の有力大家名の内政介助などにも尽力している。ただ、それは本稿の主題ではない。寛永7年（1630年）まで生きて、75歳にて死去。法名は、天海により「寒松院前伊州羽林道賢高山権大僧都」とされた。
- 20) 確認できている限りでも、高虎は、浅井長政、阿閉貞征（あつじさだゆき）、磯野員昌、織田信澄、豊臣秀長、豊臣秀保、豊臣秀吉、豊臣秀頼、徳川家康、徳川秀忠、徳川家光に仕えている。主人をたびたび替えたことについては本文を読んで頂くにしても、こうした先祖の印象は江戸期の朱子学の影響もあって時代を下っても根強く残った。幕末の鳥羽伏見の戦いでは、当時の津藩主藤堂高猷が真っ先に佐幕から官軍に寝返ったとして、「藩祖の教えがよく受け継がれている」と皮肉られた。
- 21) 久芳夫人は伊勢津城にて、51歳を限りに死去。なお、久芳院の墓の隣には信長生母土田御前の墓もある。不思議な取り合わせであるが、土田御前は信長の弟信行を溺愛（できあい）し、信長を疎（うと）んじたが、信行誅殺の後は信長の庇護を受け、本能寺の変以降は同じく信長の弟信包（のぶかね）の津城に身を寄せて晩年を過ごした。



↑四天王寺（津市）  
←土田御前の墓（津市 四天王寺）